



巻頭言

理事長 吉川 允二



## 基礎研究と原子力

基礎研究は、もともと溢れ出るような好奇心から生まれて来るものです。ですからここで、基礎研究の原子力の中での位置付けなどと固いことを言い出すことは、余りびったりと来ないかもしれません。しかし、ここから始めさせて下さい。

原子力委員会の長期計画（6年6月）は、原子力開発利用の4つの基本方針を示しています。この中で、原研に一番強い関係があるのは4番目の方針「原子力利用技術の多様な展開と基礎的な研究の強化」です。前者は、核融合、高温ガス炉、放射線利用などのこと、後者は、原研のことばでいえば基礎研究と基盤技術のことになります。また、昨年11月に成立した科学技術基本法等の中でも基礎研究の重要性は高らかに謳われています。それは、基礎研究が国や人類社会の将来の発展の基盤であるという強い認識があるからです。

原子力は、原子核エネルギーという極めて凝縮したエネルギーをコントロールしながら使うものです。そのためには、基礎研究から先端技術まで幅広い研究開発を行うことが必要でした。このプロセスの中で、原子力は強い目的意識を持ち、自立性の強い研究開発を進めて来ました。つまり、他の広範な科学技術分野との交流は決して強くなかったと、私は思います。基礎研究の重要性が高まっている今日、私達原研は、貢献する分野において基礎研究を開始しましたが、その推進にあたっては他の研究機関と積極的に交流したいものです。学会活動にあっても、原子力学会に限らず、幅広く他の学会に参加して活動の範囲を広げたいものです。

自然界は、何億年も前に交配によって遺伝子を変えて行くという進化の効率的なメカニズムを発見しました。研究者も、業種や分野や職種を同じくする人達との接触に限ることなく、むしろ、異なる種属に属する人達と接触し、刺激を与え合うことが大切です。このことは基礎研究に限ったことではありません。原子力関係者も、異なる目的意識や異なる知識、したがって異なる直感や発想法を持つ他分野の人達と接触し交流してみたらどうでしょうか。これによって原子力からみれば、今まで知らなかった新しい道があることに気付くことがあるでしょうし、また原子力研究の魅力や理解が高まり、原子力の基盤が広がる可能性があります。

原研の基礎研究は、昭和62年度のイオン照射研究施設の着工以来、大型放射光研究施設の着工、先端基礎研究センターの設立、高度計算科学研究と光量子研究の発足、平成8年度の中性子研究の着手へと次々にアンビシャスな歩みを踏み出しました。すでにいくつかの研究成果を生み出していますが、今後どのような創造性の高い成果が出て来るのが楽しみです。